

[実践報告]

## 北海道東部ユルリ島における釧路校探検部の活動

徳永 仁・山田健太郎

北海道教育大学釧路校教育心理学研究室

### Activity of the expedition club of Kushiro campus at Yururi Iland, eastern Hokkaido

Jin TOKUNAGA and Kentaro YAMADA

Department of Educational Psychology, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

#### 1. はじめに

北海道教育大学釧路校探検部は1997年11月に創部、活動開始した。2000年3月現在の部員は4年生1名、3年生8名(うち女子3名)、2年生2名(いずれも女子)、1年生2名、顧問1名の計14名(うち女子5名)となっている。

1999年4月から2000年3月にかけての活動は、4月から7月の間に行われた週1回の学習会(地図の読み方など)、5月の新入生通過儀礼(川下りを含む2泊3日)、6月の釧路川源流下り、8月のユルリ島探検(3泊4日)、11月の道東山巡り(3泊4日)などが主にあげられる。

印象的な活動としては、1999年8月から2000年3月にかけて行われた根室市昆布盛漁村調査があった。これまでではキャンプや登山、川下りなど野外体験的な活動が主であったが、この調査活動は文化人類学的な要素を含んでいた。調査を行うきっかけになったのは、創部2年目の1998年秋に行ったユルリ島探検の際の根室市昆布盛漁村との交流である。その後、1999年春に大学の50周年記念企画として募集された「チャレンジプロジェクト'99」へ調査企画を応募し、採用された。そして大学から金銭的な援助を受けて、調査を行うことになった。調査報告書の大学への提出は、2000年3月10日である。ここではその報告書の中身について簡単に概要を書くが、それよりも、探検部の学生がどのようにして調査を進めてきたか、活動経過を報告する。また、学生が漁村に入り込み、漁村の暮らしや営みを生の声で聞き取ることで、漁村や漁業への認識がどのように変化し、学生自身の中でどのような変化があったのか、調査に参加したある学生の感想文「昆布盛漁村調査に参加して」を載せ、報告とした。

#### 1. 昆布盛漁村への興味

根室市昆布盛は、長節と浜松の間の太平洋に面した崖

下の漁村区である。1999年現在の世帯数は58戸、人口264人(男130人・女134人)である。ユルリ島は、昆布盛沖の東南約2.6kmの位置にある。面積約207ha、周囲約7.8km、標高43.1m、東西・南北共に約2kmの島である。島に渡る時は、昆布盛港から船を出してもらう。ユルリ島には戦後から1976年まで夏だけ漁師が定住していた。漁師が島を去るとき、それまで使っていた馬を島に残し、現在その馬の子孫20頭前後が、半野生化している。近親交配による馬の絶滅を防ぐため、かつての飼い主たちが中心になり、毎年雄馬の間引きを行い、種雄馬の交換も5年ごとに行っている。



写真1 昆布盛港から見るユルリ島

私たちの興味は、毎年行われる馬の間引きである。間引きされた馬は、食肉用として売られる。食肉用馬の低価格、間引きの際の労働力(間引きの日は1日漁を休む)、船の油代を考えれば、間引きは漁師にほとんど利益を与えない。なぜそこまでして、馬を残すのか。新聞やテレビ、雑誌などでも「珍しい風習」として数回紹介されている。が、私たちの視点は、間引きを生み出した昆布盛漁村にある。さらに言えば、昆布盛漁村での暮らしや営み、人が結びつく共同の場面であり、それらを捉えることで、なぜ昆布盛漁村で間引きが生み出され、間引きは

昆布盛の中で何を意味しているのか、知ることができるのではと考えたのである。だからこの調査では、昆布盛漁村の暮らしの認識を深めることに集中した。現在の暮らしというよりも、戦後まもない頃の暮らしまで遡り、私たちの頭の中にできるだけ再現するよう努めた。

調査の方法としては、昆布盛についての資料収集はもちろん、住民への聞き取りを中心とした。間引きのはじまる以前の暮らしの様子から現在までを詳しく知るために、高齢で昆布盛に詳しい方を聞き取りの対象に選ぶことにした。間引きの見学も予定していたが、馬の関係で、今年は間引きは行われず実現できなかった。

## 2. 活動経過

### 2.1 第1回活動

(1999年7月24日、参加者3名)

**活動概要** 事前に根室市市役所へ連絡し、総務部情報管理課と水産部を訪れた。人口推移や漁業関係の統計資料を収集した。昆布盛の成り立ちや概要を情報管理課の方から聞き、水産部では昆布盛の漁業概要を話していただいた。「(根室には)いくつかの漁村があるのに、なぜ昆布盛かを明確にしないといけない」と、指導を受ける場面もあった。

### 2.2 第2回活動

(7月31～8月3日 参加者5名)

**活動概要** ユルリ島にわたり、番屋跡の撮影、島の概況について確認した。馬の撮影も行い、行動なども確認した。宿泊はテントで、食事は自炊である。食糧は事前に用意したが、若干の海産物を獲ることもできた。漁船をチャーターしてくれた漁師さんへ、秋に間引きを見学させてもらえるようお願いした。

### 2.3 第3回活動

(9月15～16日 参加者4名)

**活動概要** 屯田兵博物館へ行った。ユルリ島の所有についての研究を行っている北大4年生のTさんに会い、情報収集をした。資料を頂いたり、昆布盛の概要について詳しく話をしてもらった。2日目には、Tさんに昆布盛町内会会長のOさん宅へ連れていってもらい、顔合わせをした。また、9月19～20日に行われる昆布盛の祭り「華盛神社祭」を見学させてもらえるようお願いした。

### 2.4 第4回活動

(9月19～20日 参加者1名)

**活動概要** 「華盛神社祭」の見学。午後6時から神社での

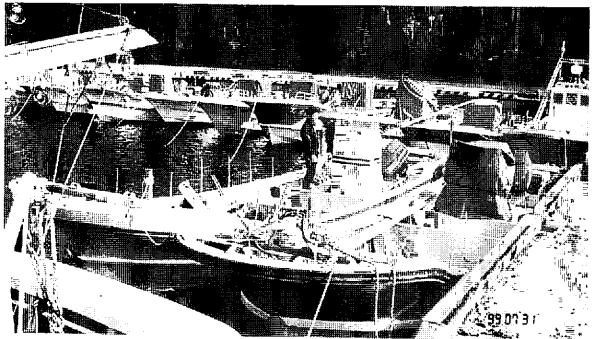


写真2 昆布盛港



写真3 ユルリ島の馬

儀式が始まり、1時間くらいで終了。その後神社内での宴会が始まる。昆布巻や刺身、おでん、魚の煮物など海産物が豊富にならぶ。酒を飲みながら、ごちそうを頂く。午後11時過ぎまで続き、その間、昔ユルリ島に住んで漁をしていた漁師さんに、当時の話を聞いたりする。神社近くの会館では、和太鼓などの出し物が行われていたようだ。夜は祭りの実行委員である昆布盛のTさん宅に泊めてもらう。次の日は、子ども相撲や子ども達の和太鼓、鼓笛隊の演技を見学した。餅投げ大会、抽選会も見学した。

### 2.5 第5回活動

(10月26～28日 参加者2名)

**活動概要** 1日目には、町内会長のOさんへの聞き取りを行う。これまでに資料収集したものを基に、昆布盛についての知識を蓄え、話を聞いた。主に、昆布盛町内会の仕組みや組織の変遷、戦後から現在までの暮らしの様

子の変化を聞いた。2、3日目には、根室市市立図書館での資料収集を行った。宿泊は落石の海岸でテントを張って、食事はすべて自炊である。

## 2.6 第6回活動

(2000年2月25日 参加者3名)

**活動概要** 町内会長のOさんへの聞き取りを行おうと思い、事前に連絡したが、入院されているということであった。とりあえずは、近所の人へ病状を聞き、お見舞いへ行くことにした。根室市立病院へお見舞いに行く。

## 2.7 第7回活動

(2月28日 参加者3名)

**活動概要** 昆布盛で唯一の商店を営むSさん宅を聞き取りのため訪れる。Sさんとは初めて会ったので、Sさんが昆布盛でどんな仕事をしていたかなど、Sさん自身のことについて主に話してもらう。また、戦後から現在までの暮らしの様子の変化を聞いた。

## 2.8 第8回活動

(3月4日 参加者2名)

**活動概要** Sさん宅を聞き取りのため訪れる。結婚、学校の様子など、戦後まもない時期の詳しい話を聞かせてもらう。Sさんの仕事の話なども聞くことができた。

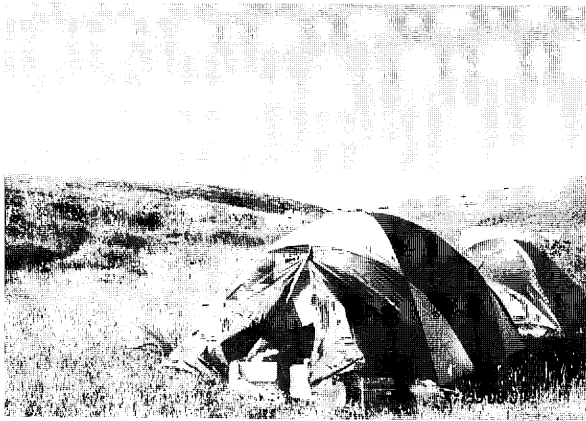


写真4 ユルリ島でのキャンプ地

## 3. 活動総括

昆布盛へ直接出向いたのは、計8回である。活動の間には、文献や資料、聞き取りの結果を整理し、次の聞き取りへ備えた。町内会長のOさんを中心に聞き取りを進めようとしたが、入院され、別の聞き取り対象者を捜す対応が難しかった。現役の漁師さんへの聞き取りもじ

っくりと行いたかったが、仕事が忙しいらしく、祭りの際に雑談風にしか話を聞くことしかできなかった。また、男性にしか話を聞けなかったのも、残念である。これらの反省点は、報告書の内容に素直に出ている。例えば、昆布漁業の経営を金銭的な具体的数字をもって描け出せなかったこと、結婚や出産などのエピソードを男性側からの目でしか描け出せなかったことなど。一応は、文化人類学的な調査であったが、その分野に関して、全くの素人であったため、北大文学部Tさんのアドバイスは大変参考になった。だが、もう少し系統的な調査の進め方ができていればと反省する。

活動参加者は、1名だけはすべての活動に参加した。他の参加者の顔ぶれは、流動的であった。そうなったのは、日程都合上の問題などもあったが、探検部の中で、この話題に対し、関心度が低かったことも要因である。これまでの活動とは明らかに性格が違い、興味を殺がれた部分があったと思う。また、自然を相手にしてきた活動から人間を相手にすることにより、別のエネルギーを使った。事前に連絡して聞き取りのお願いをしたり、人とのつながりを少しずつ膨らませていくなど、人とのつきあいに神経を使わなければならなかった。しかしながら、探検部員だけではなく、私たち釧路大の学生にとって、学生以外の人へ直接話を聞く機会を持っていない。話を聞く機会というときに、アルバイト先で雑談をするのとは違う。自分たちの意図を相手に正確に伝え、その上で話をしてもらう。その意図が曖昧であれば、相手はとまどったり、話をできないときもある。表面的な会話ではなく、相手の懐へ、気持ちよく飛び込んでいけるかが問題である。

この活動に対する部員の様子は、しらけた様子であり、それは部員を個人的に責めるものではない。大学外のものに目を向けて、そこにある現実に対面していこうという姿勢がないのは、何も探検部員だけではなく、釧路大の学生全体に感じる雰囲気であり、筆者もその1人であったことは認めざるを得ない。学内の講義には熱心な学生が数多くいる中で、そういう傾向が見られるのは残念なことである。思えば、釧路の大学で学んでいるのに、道東地域はおろか、釧路に働く人たちとの交流がないのは、大学だけが切り離された空間にいるようで不思議である。このような現状の中で、私たちは調査という堅い言い回しよりも、暗闇の中を手探りで進むような形で、昆布盛漁村へと飛び込んでいった。生の声を聞くことで、昆布盛への認識を揺さぶられ、先入観を取り除き、新た

な認識を得るといふ新鮮な体験をこの活動を通じてすることができた。

#### 4. 報告書概要

報告書「昆布盛漁村の暮らしと馬の間引き」は2部構成になっている。第1部「昆布盛概要」では、文献、統計資料を基にして、明治初期の漁民の入植から現在に至るまでを郷土史的なまとめ方で書いた。また、利用の歴史も含めたユルリ島概要についても、ここでまとめられている。第2部「昆布盛漁村の暮らし」では、昆布盛で商店を営むSさんの聞き取りを基にして、戦後まもない当時の暮らしを文章化した。昆布盛における共同の場面を主に取り上げた。それは以下の章で構成されている。「学校-運動会など」「結婚式」「出産・急病人」「クジラが浜にあがったとき」。また昆布盛漁村の雰囲気表現したものとして、99年9月19~20日にかけて参加した「華盛神社祭参加体験記」も資料として載せた。それらをまとめた上で、最後に「馬の間引き」の章で、昆布盛の暮らしとの関連づけをしながら馬の間引きについて私たちがなりの考察を試みた。



写真5 華盛神社

昆布盛の暮らしの変化は、日本各地がそうであったように、戦後まもない時期からの急速な生活環境の変化に対応して、進んできた。親方・子方から漁業協同組合による漁業経営の解体、電気、電話、水道の整備、港、干場の整備、船の動力化、道路が整備され、昆布漁業に欠かせなかった農耕馬がトラックへと変わった。これまでは、急病人が出たら若い衆が戸板にのせて運んだなど、生活のための共同の場面が、昆布盛では必然的に数多く存在した。いずれも、昆布盛漁村が、運命共同体的な漁

村として生きてきたことを裏付けるものである。生活環境の変化により、昆布盛では運命共同体的な共同の場面は残されていない。その中で、1970年代後半から始まった「馬の間引き」という共同の場面をどう捉えるか。私たちが聞き取ってきた共同の場面は、生活が絡んでいて、必然性があった。が、馬の間引きには、これまで昆布盛における共同の場面が必要条件であった「生活」がすっぽりと抜けている。だから、そこには運命共同体的な悲壮感は漂わない。明らかに、共同を作る際の動機が変わっている。だが、これまで昆布盛漁村を支えてきた共同によって、ユルリ島の馬の問題を解決しようとしている。だから、馬の間引きは、共同体として生きてきた昆布盛漁村の名残を示しつつも、生活環境に伴い変化してきた昆布盛漁村の姿をも表すという2つの側面を持っている。

#### 5. 部員 K.Y. の感想文

昆布盛漁村調査に参加して

私が昆布盛漁村の調査に参加することになったのは、1月も終わりにさしかかる頃だった（探検部に入部したのが去年の11月だったのでこの時期の参加になった）。その頃は報告書提出期限が刻々と迫ってきていた。そのため、今までに集めた資料の整理と吟味、そして足りない部分を、聞き取り調査を行うことで補っていくことが課題になっていた。しかし当時、私は昆布盛の調査内容については時々世間話に聞く程度であったため、ほとんど知識・情報がなかった。そんな中で、戸惑いながらも先輩の強い押しもあって参加することになった。

私がおこなった作業は、聞き取り調査への参加と報告書作成の一部である。調査の過程で助かったのは、昆布盛概要執筆のための資料をまとめる作業が、聞き取りに行く以前にできていたことだ。これによって、多少なりとも昆布盛に関する知識を頭に入れながら聞き取りに参加することができた。

聞き取り調査へは、合計3回参加した。しかし、1回目は町内会長のOさんを対象に聞き取りを行おうとしていたが、本人は入院されていて聞き取りを行える状況ではなかった。そこで私たちは計画が狂うことになり、どうしたものかと途方に暮れた。そこで、2回目の聞き取りでは、一か八かで商店を営むSさんに聞き取りを試みた。突然の訪問にも関わらず、Sさんは快く私たちの聞き取りに応じてくれた。その流れで、3回目の聞き取りもSさんをお願いすることになった。

聞き取りでは、主に昔（戦前から）の昆布盛漁村の暮

らしの風景を語ってもらった。以前の暮らしについては、集めた資料の中にもある程度は記述されていたのだが、実際にその時代を体験した人から直接話を聞くと、やはり重みが違う。結婚や出産、戦時中の学校生活、仕事の話（Sさんは漁師ではなく船大工だったが）などや、近所付き合いのエピソードなどは、昔と現在の違いの大きさをとても感じた。そして、その違いが大きければ大きいほど、私たちはその風景を思い浮かべるのに苦勞した。

実質2回の聞き取りができたが、2回では正直言ってまだまだ聞き足りないというのが本音である。挨拶程度の聞き取りで終わってしまった感がある。また、昆布盛を調査するきっかけになったのは、地元で行われている「馬の間引き」であったのに、間引きをしている人たちからは聞き取りをしていないというのはやはり問題であったと思う。間引きについて無理矢理何らかの意味づけをしようとは思わないが、少なくとも現在までその風習が残されている理由を直接聞いてみたかったのは事実である。その点のややもやが、今でも私の中に残っていて、実際に話を聞けなかったのは残念であった。

加えて、聞き取りをするなかで思ったことは、私たちの価値観を揺さぶるような話は、こちらが予想しないところにあるということである。つまり、私たちが質問として予想もしないところから、意外な話が出てくると、それは生の話として、印象的に聞く側に伝わってくる。堅苦しく、こちらからの質問責めにあわせても、それは所詮聞く側の考える尺度、先入観でしか話が聞けていないのである。今回の聞き取りでも、鯨や馬の肉を食べるなどのおもしろいエピソードがあったが、それはこちらがあらかじめ用意した質問以外から出てきた話であった。難しいことかもしれないが、話す側が自由に話せる雰囲気をつくるのが重要なのではと思った。何気ない雑談の中に、意外におもしろい話が隠されている気がする。そのような雰囲気になるには、やはり数多く聞き取り相手にふれ合うことが必要であるのだが、それができなかった。残り限られた時間ではそれはしかたがないことでもあったのだが。

聞き取りができなかったものも含め、今回の昆布盛への3回の訪問は、不十分なものではあったが、だからといって決して無駄ではなかったと言える。同じ内容の話でも、文章で書かれたものを読みとると、実際に経験した人から話を聞くのとでは、その自分の中への伝わり方に雲泥の差がある。当然、実際に目と耳で経験者から聞いた方がリアルに印象として残る。それは、報告書を

作る際にはとても欠かせないことであった。何よりも、自分と違う環境で生きる人、自分が生きていない時代に生きていた人とふれ合ったり、話を聞くということは、先にも話したように、それまでの自分の価値観を揺さぶり、視野を広げてくれる大きな経験であった。思えば、そのような話を聞かせてくれる人は、祖父母などのように身近にもいたのである。今まで、その機会を逃してきたことを今回の調査を終えて、ふと残念に思った。



写真6 華盛神社祭での子ども相撲大会

## 6. おわりに

筆者も含め、釧路大の学生の多くは、学外に出向き、人に話を聞くなどして自分の疑問や好奇心を解決することに、大きな壁を持っている。それは、見知らぬ人に会い、話を聞くことへの警戒であり、何も無いところに人間関係を作っていかなければならない面倒臭さでもある。

「やってみたくは、どうしても動けない自分があるんだ」という葛藤は、この活動に限らず、学生生活のあらゆる場面で何度も聞いたような気がする。その葛藤は、意外に根深いことも、活動を通じて感じ取ることができた。その人の葛藤をどううち破ればいいのか、またはそれは個人的な問題なので、他人が踏み込んで無力なのか、最後まで分からなかった。

私たちも含め多くの学生は、自分の視野を広げたいと思っている。そして視野を広げるためには、知らない人にたくさん会い、未知なる体験をし、大きなことをやらなければと思いつまんでいる。テレビや雑誌などでは、その成功例がドラマチックに紹介されたりする。そして、それを羨ましく思い、自分もやってみたくは、でもやれないと、また葛藤が始まるのである。

活動を通じて、私たちの周りには、異なる時代、環境

を生きてきた人が、たくさんいることを知った。ごく当たり前のことだが、私たちはそのことに今まで気づかなかった。「思えば、そのような話を聞かせてくれる人は祖父母などのように身近にもいたのである。今まで、その機会を逃してきたことを今回の調査を終えて、ふと残念に思った。」と感想文の中にも、正直に述べられている。そう考えると「やってみたいけど、どうしても動けない自分があるんだ」という葛藤はずいぶん後ろ向きだと思う。自分の日常の中に存在しているものに、無関心でありながら、いつしか自分をリセットできるような出来事を探しては、一生後ろ向きな葛藤をし続けるだろう。私たちの身近なところには、考える素材が山ほど転がっている。

### 参考文献

伊藤初太郎 1938 和田村史

- 木村李花子 1993 ユルリ島の馬—動物行動学的接近の愉楽—財団法人馬事文化財団
- 近藤憲久 1995 ユルリ島・モユルリ島と齒舞・色丹島における海鳥類の生息状況 根室市博物館開設準備室紀要
- 山田豊治・根室高校地理研究会 レポートユルリ島第2次調査行(未刊行)
- 釧路市立博物館 1984 道東海岸線総合調査報告書
- 昆布盛小学校 1985 昆布盛小学校50周年記念誌 昆布盛小学校 1987 小学校3・4年生副読書「私たちの昆布盛」(未刊行)
- 根室市立落石小学校 1984 海溝九十周年記念誌「霧笛」(未刊行)
- 根室市立落石小学校 1994 海溝百周年記念誌「潮風」
- 根室新聞社(編) 1979 海に生きる 根室新聞社
- 昆布盛町内会 1986 華盛神社御創祀百年祭記念誌「根室の地名」 根室市郷土資料センター